まいまいつぶろ

まいまいつぶろ　© 1956　河出新書

昭和31年5月25日　第1刷發行　¥ 120

著者　高峰秀子（たかみねひでこ）

東京都千代田區神田小川町3—8
發行者　河出孝雄

東京都千代田區飯田町1—23
印刷者　中内佐光

發行所　東京都千代田區神田小川町3—8　株式會社　河出書房

曙印刷

落丁本・亂丁本はお取替へいたします

まいまいつぶろ

●

高峰秀子著

河出新書

著者略歴

本名松山秀子。大正一三年三月二七日、北海道函館に生れた。六歳のとき松竹蒲田の子役募集に應募「母」でデビューした。その後東寶に移り、出世作「籠方教室」「馬」などを撮り、かたはら文化學院に通つた。戰後、新東寶を經て現在フリー。戰後の作品としては「細雪」「宗方姉妹」「カルメン故郷に歸る」などがある。昭和二六年六月渡佛、アメリカをまはつて一二月に歸國した。その後「二十四の瞳」「浮雲」などに出演して好評を博し、昭和三〇年度ブルーリボン賞（女優主演賞）を授與された。最近作「妻の心」。繪はチャーチル會に所屬する。著書に「巴里ひとりある記」があり、その才筆ぶりがうたはれてゐる。昭和三〇年二月、木下惠介氏の媒酌により、突然、脚本家松山善三氏と結婚、世を驚かせた。住所東京都港區麻布永坂町一。

はしがき

まいまいつぶろ　とは、でんでん蟲のことです。でんでん蟲とは、かたつむりのことです。

この本のタイトルを、何とつけようかと考へてゐたら、まいまいつぶろといふ　かはいい音の妙な呼び名が浮かんできて、私の頭の中へピタリと居坐つてしまひました。

小ちやいくせに大きな重たいカラを背中にしよつて歩きます。ちよいとやはらかな頭を出して、つつかれるとすつとひつこめてどこかへ歩いて行つてしまつて、又向ふの方で頭を出してあたりを見まはしてゐます。何となく、それで、まいまいつぶろといふタイトルにする事に決めました。

高峰秀子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目次

私の顔……九
私の歴史……一一
私はこんな人に支へられて仕事をしてゐる……四九
雑記帳から……五三
ミルク・卵・チーズ……五三
ふらんすの下宿……五三
眞珠の首飾……五四
七歳の浮雲……五五
ジキル博士とハイド氏……五五
花束……五六
「二十四の瞳」小豆島ロケ先にて……五八

平凡で、誠實で、ありのままで……六九
私の見た内側の人物論……八〇
小さいコトやんのこと……八七
結婚まで……九四

さしゑ　高峰秀子

まいまいつぶろ

私の顔

顔も、目も鼻も、すべてが丸い、鼻の下が短かい、始末におへない童顔である。

その童顔が商賣の役に立つたときはもうとつくにすぎて、三十歳ともなれば、じやまにこそなれ、プラスのプの字にもなつてはくれない。

童顔だつて人並みに年はとるのだし、シワも出來るのであるから、童顔にたよらず、童顔を克服してゆくといふのが私の課題であると思つてゐる。とにかくこの顔立ちではといふので、役のイメーヂと、自分の顔があまりにもかけはなれてゐる時の、殘念無念さは、ちよつと例へやうもないほどの、悲慘である。

その無理を、ええいッと承知の上でやり通してしまつたのが「雁」のお玉である。原作にはたしか、うりざね顔とかあつたやうだし、あの文章は、どうしても丸顔のお玉は思ひ浮ばないやうに書かれてあつたが、私のお玉は、讀んで字の如く、日月ボールか、變り玉みたいなお玉であつた。

最近では「二十四の瞳」の老け役である。童顔のおばあさんだつて、この世の中に存在しないといふ理由はないのだから、せいぜい他愛のない自然な感じの老けになれれば、と思つてことさらにシワを畫いたりすることは止めて、ヒフが荒びて見えるやうにドーランをまだらにつけるくらゐにメークアップでは止めたが、それでも最大難關である、いと短かき鼻の下は出來るだけひきのばして、常に前齒が見えぬやうに話し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

方、笑ひ方に氣をつけた。自分では老けてゐるつもりでも、何かの拍子に、馬のやうな大きな門齒がニヨキリと顏を出したりすると、どうみても舌切雀のおばあのやうなご面相になつてしまふのである。「二十四の瞳」は喜劇ではないから、私は大變恐縮して、厄介な馬の齒をひたがくしにかくした。

年を取つてまづ第一にくづれるのは、口元である。齒が私のやうにでつかく白くガンと萬里の長城のやうに並んでゐるのでは、外すのももつたいないから困つてしまふのである。だからといつて、自然に齒並びがガタガタになつて口元がくづれてくるまで、老け役を待つてゐるわけにもゆかない。幸ひ木下先生の配慮で、ゲラゲラ吹き出されるやうなアップもなかつたやうであるが、それでもしよせん、無理は無理であつたので、成功したとは思へないが、私には私なりの、こんな涙ぐましいなやみや努力があつたことは認めていただきたい。

やけくそになつてゐるわけではないが、この頃の私は、もはや顏についてはあまりこだはらぬことにしてゐる。あまりの無理でない限りは、少しづつでもお芝居の方でそれを補つてゆきたいといふ、圖々しくもけなげな心境である。

それにしても、何しろ映畫界に百年もゐたので、この顏も多勢の寫眞やさんにナメる如く撮られ盡して、私にはもう顏がなくなつたのは悲しいことである。

私の歴史

古い話になるけれど、命の洗濯をしにパリに行つてゐた時、ソルヴォンヌの近くの小さなロシヤ料理店で食事をしてゐたら、若いヂプシー女が入つてきて、私の側にぺたんとくつついて、手相をみせろといつてはなれない。私は言葉もよく判らないし當惑したが、本物のヂプシー女といふものをゆつくり見たい興味で手相をみてもらふ事にした。

女は眞黑い髪の毛を眞中でぴつたりと分け、大きな灰色の眼をギラギラさせ乍ら眞すぐに私を見つめた。やがて私の持つていたハンケチを手に取りくしやくしやと丸めて赤い唇をとがらして一方のすみつこをふつと吹いた。そして早口でかうしやべり出したのである。

「お前は赤ん坊よりちよつと大きくなつた頃から大人達の中へ入つて仕事をしてゐる」

「そして現在もその仕事をつづけてゐてそこらの男よりずつと高給をとるだらう」

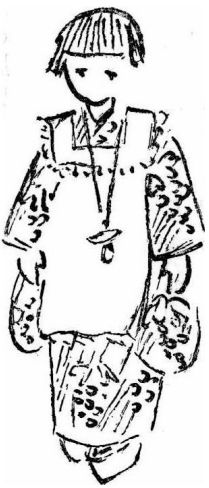
「お前はここから歸つて又その仕事をつづける事になる。お前の家庭は肉親の愛情がない。お前は仕事と愛を一つの手に持つことが不可能である」

これ以上つづけられると私の頭では、たうてい彼女の言葉を理解出來ないと思つたので、あわてて、一〇

チャンの頃

○フランの札を私のハンケチと交換に、まだ五月蠅くしやべりつづけようとするヂプシー女を後にして外に出てしまつたのであるが、日本を遠くはなれたパリの町で少々涙ぐましくなつてゐるところだつたので、そのヂプシー女の短かい言葉が、わあと頭の中でふくれ上りいろいろな事が胸の奥からとめどもなくながれ出してきた。私はゆつくりノートルダム寺院の方に歩き乍らそのながれに何の抵抗もなく身をひたしてゐた。

私の頭の中には、神經質に疲れ果ててフヌケのやうにパリを歩いてゐる私ではなく、小さい小さいおかつぱ頭に、胸にゴムの乳首をぶら下げ白いエプロンをかけたチャン（私の小さい時のアダ名）が小さいぽつくりをはいて立つてゐた。



私は映畫界に入つて、二十餘年になる。從つて、「いろいろな思ひ出があるだらう、それを書いてみな」といふ雜誌Eからの注文なのだけど、さてかうして原稿用紙とペンを前にして坐つてゐると、昨日の夢をも一度み直せといはれる如く、あいまいもことして、つかみどころがなく困つてしまふ。

何しろ私が松竹へ入社したのは、五歳の時で、何が何だか判らないままにずるずるべつたり、子役から少女に、そして現在に至つてしまつたんだから、好きもへちまもあつたもんではない。今でも「あなたは映畫が好きですか」といふ質問が一ばん苦手で、そのたび

に、あらためて考へこんでしまふ位だ。で、とにかく、事の起りは、松竹で「母」といふ映畫の子役を募集した事に始まつたのである。私の父の友人が松竹にゐた事から、いたづら半分に、母に手をひかれて初めて活動やののれんをくぐつたのだつた。

男役だつた私

首實驗の當日。子供心にもビックリギョーテンした事は、その日の撮影所はまるで正月がWつて來たやうに、着飾つた子供達が五、六十人、子供以上に滿艦飾をほどこしたお母さん達に手をひかれて、ずらり列をなしてゐた事だつた。私はぶどうの模樣のメリンスのきものに、白いエプロン。そしてあまり風采の上らぬ母に手をひかれて列の最後に加はつた。

眼鏡を光らせた、こはさうな人や、ゴルフズボンをはいたたいこ腹の人（後で判つたけど彼が野村芳亭監督）などが、私たちの前を二、三度ウロついただけでその日はお終ひだつたが、どういふ風の吹きまはしか、私が選ばれてしまつたのであつた。

私の子供の時代は、しよんぼりとして眼尻の下つた、何か哀れつぽいとこのある子だつたさうで、撮影所の人たち、殊に「母」主演の川田芳子さんなどは、とても可愛がつて呉れたものだつた。

急にきれいな衣裳をきせられたり、硯のすみをぴちやんと顔にはね返すところがあつて嫌だつたり、何でこんな目にあはされるのかと子供心に煩悶したものだつた。

私は何時も首からゴムの乳首を紐でぶら下げてゐた。

「母」が終ると、又何かの映畫に出ろといはれそれが終ると又一本で、何時の間にか私は、子役といふもの

になつてしまつてゐた。

小さい頃は、今みたいにおしりが大きくなかつたから、男の子の役が半分位だつた。

片方の映畫は女の子、片方の映畫は男の子で貸せ貸さないで、私は車にのせられて床やへ連れてゆかれ、無理やり坊ちやん刈りにされてしまひ、それでも片方は意地になつて、帽子のかぶり通しで女の子に使はれた事もある。

松竹といふところは、その頃子役が百人位もゐて、それが金にあかせて子供を映畫に出さうといふ親たちが半分以上なので、何も男の子がゐるのに秀ちやんを使はなくたつてといふ工合で、子供の私に當るより、母がちくちくやられて、辛かつたらしい。

小學校へ上つたが、仕事がいそがしいので、一寸も通學ができない。でも要領？　がよかつたのか、成績はよかつた。

「鼠小僧次郎吉」で、京都の撮影所へゆき、私は初めてクワイ頭のカツラを被せられて（これも男の子だつた）時代劇に出た。忘れもしない、支度ができて、暗いセットの中へ入つてゆくと、移動車に當時の林長二郎（はせがはかずを）さんが腰かけてゐられて、美しい大きな眼でじろりとみられて、何となくどきつとした時のこと。ませてゐたのか、きれいだなアとその時思つた。

京都の賀茂川のほとりの宿から、撮影所に通ふのはとても樂しかつ

た。

そして宿の側が坂東好太郎さんの家で、坂東さんは、とても私を可愛がつてくれて、動物園へ連れて行つたり、お風呂に入つて洗つてくれたり、その頃戀愛眞最中だつた、飯塚敏子さんが、本氣でやきもちを燒く位、可愛がつてくれた。

私の撮影所生活は、毎年かうして續いた。何しろ子供だから仕事がいやになると、何のかのと獣々をこね、揚句の果ては、べそかきの一手で、ずゐぶん大人達をなやませたらしい。

キャラメル「いや」、チョコレート「いや」、おでん「いや」、風船「いや」、たうとうごて秀といふ名前をもらつてしまつた。

助監督さんの背中へおしつこをしたり、セットの中でグウグウねむつてしまつたり、今でも松竹の人達に會ふと「あの秀坊がねえ」なんて、しげしげ顔をながめられるので、笑つていいのか澄ましていいのか困つてしまふ。

松竹京都撮影所にて

「頬を寄すれば」といふ、島津保次郎さんの映畫があつた。岡譲二さんの娘になつて、そのタイトルバックが、この親子がシルエットで、タップ・ダンスを踊るといふ、その頃では大變モダンだつた事をおぼえてゐる。

「十九の春」といふ五所平之助先生の映畫では伏見信子さんといふ女優さんに可愛がられる役で、何となくその仕事がたのしかつた事を、おぼえてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong